仏教と芥川文学

――戯曲的興味ということ――

古田博保

序（「キリスト教と芥川文学」のメモ）

僕は年少の頃、硝子画の窓や振り香炉やコンタスの為に基督教を愛した。その後、僕の心を捉へたものは異人や福音の伝記だった。僕は彼等の捨身の事蹟に心理的或は戯曲的興味を感じ、その為に又基督教を愛した。即ち僕は基督教を愛しながら、基督教的信仰には徹頭徹尾冷淡だった。しかし、それはまだ好かった。僕は千九百二十二年来、基督教的信仰或は基督教徒を嘲る為に続々短篇やアフォリズムを艸した。しかしそれらの短篇はやはりいつも基督教の芸術的荘厳を道具にしてゐた。即ち僕は基督教を軽んずる為に反って基督教を愛したのだった。（**ある鞭**）

右の記述を見てもわかるように、彼は年少の頃からキリスト教に興味を持っていた。興味を抱くことは、恋するという境地に道が通じていないわけではない。しかし彼は、その道を歩むことに極限に追いつめられたようなきびしさを自覚することを忘れ、いわば、新聞社から派遣されたアフリカ探険隊が、読者の興味と歓喜を呼ぶ記事を収集するために未開の国を歩むように、その道を歩んだ。そこには戯曲的興味以外の何物もない。いくばくも歩まないうちに彼は、この未知の国の道路がいかに険しく歩みにくいかを知り、理知的な頭脳は、一を聞いて十を知るごとく、すべてを認識しえたと錯覚した。その時彼の頭の中で、自分の母国の道路がたえず比較されていた。それが仏教であることは言うまでもない。

キリスト教に対する彼のこういう姿勢は、しかし、彼が死を意識し始めた晩年になって崩壊していく。それは、彼自身、遺稿「**西方の人**」の中で告白している言葉を見れば容易にわかる。

わたしはやっとこの頃になって四人の伝記者のわたしたちに伝えたクリストといふ人を愛し出した。クリストは今日のわたしには行路の人のやうに見ることは出来ない。（**西方の人・遺稿**）

かつては、キリスト教に戯曲的興味を感じ、明折な理知を誇りと

して信仰者の心理を嘲笑し、これを自身に近づけなかった彼は、晩年になって「行路の人のやうに見ることは出来ない」と告白した。その誘因は、彼自身が「死」を身近かなものとして意識し出したからに間違いなかろう。ただ、「死」を意識せしめた原因については、ここで簡単にふれることは早計である。ただ、それが彼の宗教観をよりいっそう掘り下げて見ることによって、よりたしかなものになるのではなかろうかということだけは言える。いずれにしても、晩年の彼が、キリスト教を彼自身の問題として、主体的に把握していることは注目すべきである。いわば彼は、キリストを恋しようと努力した。しかし、キリスト教に対する評価は、ついに以前の域を出ることはできない。

彼は神を力にした中世紀の人々に羨しさを感じた。しかし、神を信ずることは——神の愛を信ずることは到底彼には出来なかった。あのコクトオさへ信じた神を！（**或阿呆の一生・五十　俘**）

彼の理智は、キリストを神として信仰することを拒否した。彼の目にうつったキリストは、古代の「ジャーナリスト」であり、「詩人」であり、「譬喩」とよばれる「短篇小説の作者」だった、と同時に、「新約全書」とよばれる「小説的伝記の主人公」であり、ストリントベリイも、ボオも、ホイットマンも、ゲェテも、キリストの一人だった。「**西方の人**」におけるキリストは、とりもなおさず芥川竜之介自身だった。

キリスト教に対する竜之介の姿勢を要約して言えば、晩年の挫折はあったとしても、結果的には「戯曲的興味」以外の何物でもなかったと言える。その戯曲が、俗にキリシタン物として定説化されている一連の作品、つまり大正五年十月「**煙草と悪魔**」、十二月「**尾形了斎覚え書**」、六年五月「**さまよへる猶太人**」、七年八月「**奉教人の死**」、同「**るしへる**」、十一月「**邪宗門**」、八年四月「**きりしとほる上人伝**」、八月「**じゆりあの・吉助**」、九年四月「**黒衣聖母**」、六月「**南京の基督**」、十年十二月「**神々の微笑**」、十一年三月「**報恩記**」、八月「**おぎん**」、十二年三月「**おしの**」、十二月「**糸女覚え書**」、昭和二年三月「**誘惑**」の十六篇と、大正六年三月「**貉**」、七年六月「**開化の殺人**」、十三年三月「**第四の夫から**」を加えて数えうることは、かなり明確に予想されよう。そして「**西方の人**」こそ、彼の最後を飾るにふさわしい戯曲といえる。これに、彼の**アフオリズム**をも加えて、キリスト教への冒瀆はすべてをつくす。

一

「仏教と芥川文学」を考察する時、先に述べた「キリスト教と芥川文学」のメモが大きな意味をもってくる。とりわけ、晩年の彼が「クリストは今日のわたしには行路の人のやうに見ることは出来ない」と告白した事実は、彼の仏教観の考察に大きな示唆を与える。

芥川の作品中、仏教を主題にしたり、何らかの形で材料としたり、仏教的雰囲気を少しでもにおわせた作品を見てくると、彼の文学生活中（大正三・四年～昭和二年）ほとんど平均して散在することに気づく。今それを列挙してみると次のごとくである。

「**青年と死**」（大正三年八月）

「孤独地獄」（同二月）
「運」（同十二月）
「道祖問答」（同）
「偸盗」（六年四月）
「戯作三昧」（同十一月）
「袈裟と盛遠」（七年三月）
「蜘蛛の糸」（同四月）
「地獄変」（同）
「るしへる」（同）
「枯野抄」（同九月）
「邪宗門」（同十一月）
「或敵打の話」（九年四月）
「杜子春」（同六月）
「捨児」（同七月）
「アグニの神」（同十二月）
「往生絵巻」（十年三月）
「好色」（同九月）
「藪の中」（同十二月）
「俊寛」（同）
「神々の微笑」（同）
「報恩記」（十一年三月）
「おぎん」（同八月）
「二人小町」（十二年二月）
「おしの」（同三月）
「伝吉の敵打ち」（同十二月）
「第四の夫から」（十三年三月）
「文章」（同三月）
「尼提」（同八月）
「点鬼簿」（同九月）
「玄鶴山房」（昭和二年一月）
「河童」（同二年）
「歯車」（遺稿）

（年代は吉田精一編筑摩書房「芥川竜之介全集」による）

右の事実は、芥川が意図的にせよ無意図的にせよ、「仏教」と無縁でありえなかったことを示している。

仏教の世界に生きる「戯作三昧」の主人公滝沢馬琴。「蜘蛛の糸」における極楽・地獄の設定。「枯野抄」の中の伝統的な仏教世界の雰囲気。「捨児」における日蓮宗の僧侶を中心とした美談。「往生絵巻」における五位の入道の仏に結縁して極楽往生するに至る絵巻。「地獄変」における地獄絵の描写。「藪の中」における伝統的仏教世界に生きる人間透察。「報恩記」における仏教的美談。「尼提」における全智者釈迦。「点鬼簿」における仏教的郷愁。以上を見ても、彼が仏教を愛していたことは十分言えよう。

加えて、彼が「ある鞭」の中で告白した、千九百二十二年以後に書いたキリスト教的信仰あるいはキリスト教徒を冒瀆するための作品、つまり、「報恩記」「おぎん」「おしの」と続く一連のキリシタン物において描いた、キリスト教と仏教の対決を見てもそれが言える。

「おぎん」に例をとれば、あれほど強くキリスト教を信仰していたおぎんは、死の直前になって、「わたしはおん教を捨てました。

その訳はふと向うに見える、天蓋のやうな松の梢に、気のついたせるでございます。あの墓原の松のかげに眠っていらっしゃる御両親は、天主のおん教も御存知なし、きっと今頃はいんへるのにお堕ちになっていらっしゃいませう。それを今わたし一人、はらいその門にはひったのでは、どうしても申し訳ありません」と告白する。つまり、竜之介は、九回の裏に逆転打を放つ野球選手のような爽快さを感じながら、仏教チームに勝利をもたらすのである。

かかる見地から、多くの竜之介愛好者ないし研究家は、竜之介の信仰した宗教を仏教に帰着せしめる。しかしそれは誤りである。

二

誤りの証しは、以下に述べることによって自明なものになるのではなかろうか。

「**蜘蛛の糸**」「**杜子春**」における極楽・地獄の設定は、仏教思想を肯定した上で生まれたものであった。「**蜘蛛の糸**」は大正七年五月、「**杜子春**」は大正九年七月、雑誌「赤い鳥」に発表されたもので、いずれも児童文学の範疇に属する。芥川の児童文学は「積極的な意味においても消極的な意味においても、児童的な世界における真実さの憧憬希求のあらわれ」（恩田逸夫・芥川竜之介の年少文学）であったとしても、それが芥川のきりつめた真情でなかったことは明らかである。おそらくそれは、幼年時代に「西遊記」「水滸伝」「八犬伝」「釈迦八相倭文庫」などを与えた家に育てられた芥川の、強く根ざした児童的世界にすぎなかったのであろう。

「**報恩記**」「**おぎん**」「**おしの**」と続くキリスト教冒瀆の作品にしても、きりつめたきびしさは感じられない。それはキリストチーム対仏教チームのゲームにすぎない。いわばそれは遊びである。

彼が仏教を信じていたのではないことは、「**西方の人**」の中で告白した「クリストは今日のわたしには行路の人のやうに見ることは出来ない」という告白を見れば明確となる。仏教を含めて、すべての既成宗教を信ずることが出来なかったゆえに、彼はキリスト教を恋しようと努力したのである。彼にあって、仏教は子供の夢を満たすお伽話のようなものとしてしかながめられなかった。それゆえにこそ、死を意識しだした晩年、宗教をさしせまったものとして感じた時に、仏教を求めるかわりにキリスト教を求めたのである。

彼が何かを信じていたとすれば、それは仏教ではなく、「善悪の彼岸に立つ悪魔」主義だった。

> 我々は風や旗の中に多少の聖霊を感じるであらう。聖霊は必ずしも「聖なるもの」ではない。唯「永遠に超えんとするもの」である。ゲエテはいつも聖霊にDaemonの名を与へてゐた。のみならずいつもこの聖霊に捉はれないやうに警戒してゐた。が、聖霊の子供たちは――あらゆるクリストたちは聖霊の為にいつか捉はれる危険を持ってゐる。聖霊は悪魔や天使ではない。勿論、神とも異るものである。我々は時々善悪の彼岸に聖霊の歩いてゐるのを見るであらう。善悪の彼岸に――（**西方の人**）

芥川の善悪相関の思想は、このように「**西方の人**」においてもはっきりと見ることができる。その思想は、キリスト教の立場から言えば、宗教と道徳の混同であったわけなのだが……。信仰はまず信

ずることから始まる。しかし彼の理知的な頭脳は、理屈をぬきにしては信じえない。彼はあくまで宗教を科学的な頭脳で調査し、公式の不分明なものは捨て去る。さらに彼は言葉を続ける。

「我々を造ったものは神ではない。神こそ我々の造ったものである」――かう云ふ唯物主義者グウルモンの言葉は我々の心を喜ばせるであらう。それは我々の腰に垂れた鎖を截りはなす言葉である。のみならずこの新らしい鎖も古い鎖よりも強いかも知れない。神は大きい雲の中から細かい神経系統の中に下り出した。しかもあらゆる名のもとにやはりそこに位してゐる。（**西方の人**）

「神は大きい雲の中から細かい神経系統の中に下り出した」ことを認めると同時に、「しかもあらゆる名のもとにやはりそこに位してゐる」ことをも認める以上、彼は「我々を造ったものは神ではない、神こそ我々の造ったものである」というグウルモンの唯物論に魅力を感ずる反面に、そこに安住することが出来なかったのである。そして、神が我々を造ったのでも、我々が神を造ったのでもないとすれば、神は我々と共に生まれたことになる。それでは、「**西方の人**」におけるキリスト――これはすなわち芥川竜之助自身――の崇拝した「神」とはいかなるものであったろうか。それがキリスト教における神でないことは言うまでもない。

作品「**素戔嗚尊**」における主人公素戔嗚尊は、悪魔（＝善悪二極の間を踏み迷う「悲しき運命」）的人物として描かれているのであるが、その中で次のような「神」の声が聞こえる。

素戔嗚よ。お前は何をさがしてゐるのだ。おれと一しょに来い。おれと一しょに来い。素戔嗚よ……（**素戔嗚尊**）

これは、仲間である他の神々（神話の世界の神）から見はなされた彼が、嶮しい岩むらの上に立っていた時、谷間から吹き上げる風に混って聞こえてきたというのである。それは大自然の中から響きわたった。この声が、芥川が信じて止まなかった神の声であったにちがいない。また「**神々の微笑**」における「大きな桶を伏せた上に踊り狂っている堂々とした体格の女達」や「根こぎにしたらしい榊の枝に玉だの鏡だのが下ったのを、悠然と抑し立てている逞しい男達」や「彼等のまわりに、尾羽根や鶏冠をすり合せながら絶えず嬉しさうに鳴いてゐる数百の鶏」やらがたむろする神話の世界において、神々たちが信じていた大日霊貴こそ、芥川の神であったにちがいない。

これらはいずれも実在としての神の如く、いいかえれば、形のある神の如く書かれているが、芥川の頭にあったものは、彼が詩的正義と定義しているように、超越的実在でなく、一つの「文化的理念」としての神であった。

「信者になる気はありませんか〈中略〉。何もむづかしいことはないのです。唯神を信じ、神の子の基督を信じ、基督の行った奇蹟を信じさへすれば……」

「悪魔を信じることは来ますがね。……」（**歯車**）

芥川は「**歯車**」の中で、キリスト教を信仰するように勧められて、悪魔なら信じることができると回答している。勧めたのは室賀

文武である。その時のいきさつを吉田精一著・新潮社「芥川竜之介」は次のように述べている。「彼に宗教の門に入ることをすゝめて止まなかったのは、室賀文武という、彼の古くからの知人であった。この人は春城とも号する俳人で、熱烈なクリスチャンで、行商などをして生活しつゝ、独身生活を送っている奇人であった。彼は早くから竜之介にキリスト教徒になることを幾度も説いたが、聴かれなかった。自分の恩師内村鑑三の書をよませ、また講演にも誘ったが、竜之介は応じようとはしなかった。けれども、病弱の度が強まるにしたがって、次第に宗教に興味をよせるようになり、死期に先だつ一、二年はとくに甚だしいものがあった。〈中略〉室賀は内村鑑三著『感想十年』を竜之介に読ませた所が、彼は大いに感動し、又『聖書中の奇蹟は悉く信ずることが出来る』と明言したという。彼が最後に竜之介を訪問したのは、彼の死に先だつ十日前で、その夜は来客を帰して室賀とただ二人のみでキリスト教について熱心に語りあった。その時竜之介は『西方の人を書いたから、出たら見てくれ』といい、『君に先に見て貰ふ積りだったが、日が無かった為止めた』とも云ったともいう。」

「西方の人」は彼の死後やがて世に出る。室賀が失望したのは当然のことだろう。その中で主人公キリスト（つまり芥川自身）が信じた「神」は「悪魔」だった。換言すれば、真の悪魔でなく、時には神に見えることすらある聖霊――永遠に越えんとするもの――であったのである。人間の自由意志と決断とを麻痺させる運命の支配者、「彼をつかまえに来る兵卒」であったのである。善悪の彼岸に立つ、神（＝悪魔）という名の運命の支配者は、理知的実存主義者芥川竜之介の信じて疑わなかったものである。

かく見てくる時、芥川が仏教に安住していたのではないということは、自明なものとなろう。

三

自らを「物質主義者」、「悪魔主義者」と称した芥川竜之介の宗教思想の根本になる理論は、実存主義的「善・悪の論理」であったことは前に述べた。そこから生じた芥川の人生観が、「誰でも一皮剝いで見れば同じことだ」という言葉を是認せざるをえなかったのは当然のことと言えよう。「人生は狂人の主催するオリンピック大会だ」と言い、「いろは歌のごときものである」と称した芥川は、ついに、その理想とした人生観に破れて「死」を迎えるわけであるが、その人生観とは何であろうか。

それは基督教、仏教、モハメット教、拝火教なども行はれてゐます。まづ一番勢力のあるものは何と言っても近代教でせう。生活教とも言ひますがね。（河童）

「河童」の中で、宗教について、ラップの言葉をかりて右のように告白しているが「生活教」とは、河童の国でもっとも勢力のある宗教である。その精神は、「食べよ、交合せよ、旺盛に生きよ」であった。芥川の理想とした人生観はここにあったのである。その裏づけは、彼の作品のいたるところから見出すことができる。

「道祖問答」における、一つの悟りの境地において、色を是認する僧阿闍梨。「世の助の話」における好色漢世之助。「邪宗門」に

おいて「われら人間が万法の無常も忘れはてて、蓮華蔵世界の妙薬を瞥したりとも味はふのは、唯、恋をしてゐる間だけぢゃ」という堀川の若殿様。「**じゆりあの・吉助**」における、素朴な熱情をもち続ける吉助。「**女**」における女蜘蛛。「**好色**」において、「もう向後は御仏よりも、お前に身命を棒げるつもりだ」と言って、待従一人を愛してやまない情熱家平中。「**神々の微笑**」における、自由奔放に生きる野性的な神々達。「**一夕話**」における「僕は人生の価値を思ふと、百の若槻には唾を吐いても、一の小ゑんを尊びたいんだ」という和田。「**二人小町**」において、生への喝望のため地獄をさけた小町。「**誘惑**」における野人船長。「**歯車**」において、「疑惑、恐怖、驕慢、官能的欲望は感受性や理智の異名にすぎぬ」という僕。これらは、芥川の理想とした人生観の象徴である。

もし現在の自分の個性をそのまま持って生れかはるとすれば、先づ矢張り人間に生れかはりたい。唯もう少し、頭が良くて、肉体が丈夫で、男振りが好い人間に生れかはりたい。生れる場所は、成るべく金のある家に生れて一生食ふ為に働かずともいいやうにしたい。（**私がもし生れかはるならば**）

彼は「**私がもし生れかはるならば**」という随想の中で右のように述べているが、それは、晩年たえず動物的エネルギーを求めた芥川の真情であったにちがいない。それはゲーテ的生存と道を通ずる。それに敗北したところに芥川の「死」を我々は見ることができるのであるが、こういう思考がおよそ非仏教的であることは明らかである。その証しは、仏教の考察をすすめることによって容易になされる。今それについて述べることを省略せねばならないとしても、「戒律」という慨念を一つとって一瞥するだけでもそれは明らかなのである。竜之介の言う「食べよ、交合せよ、旺盛に生きよ」という主張は、「戒律」と深い断層で遠ざかる。

前に列挙した、仏教と関連を持つ一連の作品は、しかし、すくなくとも彼が、キリスト教を面と向かって冒瀆したような明確な形で、仏教を嘲笑していない。

保吉は新内を愛するように諸宗の読経をも愛している。が、東京乃至東京近在の寺は不幸にも読経の上にさへ大抵は堕落を示してゐるらしい。昔は金峯山の蔵王をはじめ、熊野の権現・住吉の明神なども道明阿闍梨の読経を聴きに法輪寺の庭へ集まったさうである。しかし、さう云ふ微妙音はアメリカ文明の渡来と共に永久に穢土をあとにしてしまった。今でも四人の所化は勿論、近眼鏡をかけた住職は国定教科書を暗誦するやうに提婆品か何かを読み上げてゐる。（**文章**）

彼は時々唸り声の間に観音経を唱へて見たり、昔のはやり歌をうたって見たりした。しかも「妙音観世音、梵音海潮音、勝彼世界音」を唱へた後「かっぽれ、かっぽれ」をうたふことは滑稽にも彼は勿体ない気がした。（**玄鶴山房**）

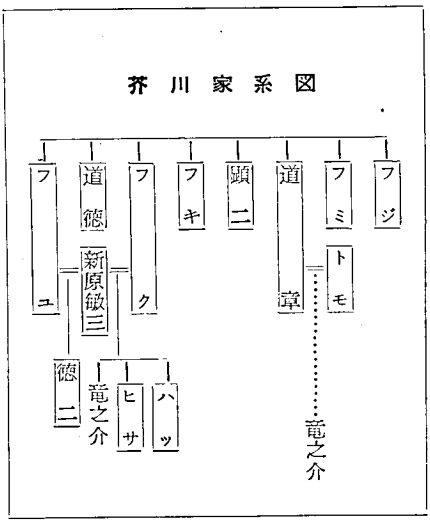
「**文章**」は大正十三年三月、「**玄鶴山房**」は昭和二年一月に書かれている。それは彼の晩年に当たる。「念仏」が新内の詠唱や国定教科書の朗読やカッポレを歌うことと同一視されているところに、仏

教への嘲笑が見られると考えられないことはない。しかし、たとえ考えられたとしても、キリスト教への目を奪うような冒瀆にくらべれば、ものの数ではない。

このような、いわば、生活教を信じた河童が、ひょっとこの仮面をかぶって、仏教徒たちに不可解な笑いを投げかけるような仏教への姿勢は、どこから誕生したのであろうか。竜之介を育てた家こそ、その責任の大半を背負うと言わねばならない。

四

芥川家系図



右の系図を見てもわかるように、最初彼は、明治二十五年三月一日、東京市京橋区入船町八丁目一番地に、牛乳屋を業としていた実父新原敏三の長男として生まれた。実母フクは竜之介の生後九ヵ月頃から発狂、そのため彼は母の実家芥川家にはいる。当時、本所区小泉町十五番地にあたり、竜之介は十八年間ここで過ごす。フクの姉フキは一生嫁さずに家に留ったが、彼女はきわめて竜之介を愛し、そのため彼は芥川家を嗣ぐことになる。

「**玄鶴山房**」の中に、「それは小ぢんまりと出来上った奥床しい門構への家だった」という記述が見えるように、吉田精一氏によれば、「当時の小泉町界隈では、芥川家は相当広い敷地と、門構えや塀からのぞいている臘梅や五葉の松の植え込みなどによって、旧家の誇りを示していたものと思われる」のである。さらに吉田氏によれば、「芥川の家の家庭生活には、江戸の文人的な乃至通人的な趣きが多分にあった。とくに下町的な江戸情趣の匂いが沁みこんでいたようである。伯母や養父母は何れも文学を好み、歌舞伎などをよく見ている。家系の上から言っても、養母は江戸末期の大通人、細木香以の姉の子である。又香以の孫えいは、竜之介の叔父新原元三郎の妻になっている。生粋の江戸人の気質と趣味とは、芥川家に色濃く流れていたのである。彼の一家は揃って一中節を習い、養父は南画をよくし、又盆栽や俳句を玩弄していた。竜之介が若くして画や骨董に興味を感じるようになったのも、こうした家庭の雰囲気が影響したのであろう。和漢の書籍もかなり多く蔵していたらしく、竜之介が自ら『子供の時にうけた旧弊な教育のおかげで、昔からあまり現代に関係のない本を読んでゐた』（私と創作）というように保守的な下町風の趣味教育を受けた」のである。さらにまた「後年の竜之介は極めて礼儀正しく、義理堅く、その為に後輩の人々に気詰りを感じさせるほどだったといわれる。そうした性格も態度も芥川家の家風や教育の然らしめる所であろう。一般に下町の由緒

ある旧家ほど、山の手にくらべて却って礼儀作法にやかましく、義理を固執し、しきたりを守り、きまりきまりにきびしい。山手からは品が悪いといわれそうな酒脱繊弱な江戸の音曲や絵画に親しむ反面において、あくまでも折目正しく、時には趣味のために実質を犠牲にすることが、下町の中流階級にはよくある。こうした空気の内に幼年時より殆んどその一生を過したことは、彼の性格に、従って彼の作風や文芸態度に、ぬき難い影響を与えた」のである。

竜之介は、こういった家の因襲のために、実生活において実質を犠牲にしたとさえいいうるほど、保守的だった。

彼は悪魔主議の詩人だった。が、勿論実生活の上では安全地帯の外に出ることはたった一度だけで懲り懲りしてしまった。（**侏儒の言葉**）

あまりに理知的な彼の知性は、旧弊な因襲を否定し、新しき思想にめざめさせはしたが、それは観念の世界にとどまり、実生活の上では安全地帯の域を出ることはできなかった。こういった彼の姿勢は、仏教に対する場合においても例外ではなかった。

僕は養家に人となり我侭らしい我侭を言ったことはなかった。（と言ふよりも言ひ得なかったのである）僕はこの養父母に対する「孝行に似たもの」を後悔してゐる。（**或旧友に送る手記**）

右のように告白する彼が、彼を育てた家の代々受けついできた仏教に、冒瀆の罵声をあびせることができなかったのは当然のことと言えよう。つまり、仏教を肯定しえない河童は、意図的ではないにしても、封建的な家が植えつけた保守性のあまり、ひょっとこの仮面をかぶって仏教にほほえみかける。あるいは、家が植えつけた保守性に加えて、幼年時代への郷愁があったとしても、かつまた、ひょっとこの仮面のかわりに、おたふくの仮面がつけられていたにしても、その笑いが、恋する者へおくる真実の微笑でなかったことにかわりはない。

芥川竜之介の仏教への姿勢をかく見てくる時、キリスト教の場合そうであったように、仏教もやはり彼にあって、戯曲的興味以上のものではなかったと言えないか。そして一で列挙した一連の作品が、その所産であると考えることはできないか。

＜参考文献＞

「芥川竜之介全集」（九巻）筑摩書房・吉田精一編・昭和三十三年発行
「芥川竜之介全集」（三十巻）岩波書店・中村貞一郎編・昭和三十年発行
「芥川竜之介集」（一巻）角川書店・昭和二十八年発行
「芥川竜之介」（一巻）新潮社・吉田精一著・昭和三十三年発行
「芥川竜之介」（一巻）角川書店・吉田精一編・近代文学鑑賞講座・昭和三十三年発行
「芥川竜之介」（二巻）文芸春秋新社・宇野浩二著・昭和三十一年発行
「芥川竜之介」（一巻）創元社・和田繁二郎著・昭和三十一年発行

「解釈と鑑賞」（四冊至文堂・昭和三十二年五月号・三十三年一月号・同八月号・同九月号）
「文芸――芥川竜之介説本」河出書房・昭和三十一年四月発行
「作家論」（一巻）新潮社・福田恒存著作集第六巻・昭和三十三年発行
「作家論（二）」（一巻）創元社・正宗白鳥著・昭和二十三年発行
「人間と文学」（一巻）筑摩書房・臼井吉見著・昭和三十二年発行
「日本文学講座Ⅵ」（一巻）河出書房・唐木順三著・昭和二十七年発行
「日本文学史通説」（一巻）有斐閣・久松潜一著・昭和二十八年発行
「近代日本文学の系譜」（一巻）教養文庫・村松定孝著・昭和三十一年発行
「昭和文学史上巻」（一巻）角川書店・荒正人他編・昭和三十一年発行
「日本文学――近代」（一巻）岩波書店・片岡良一編・昭和三十三年発行
「自殺について」（一巻）弘文堂・唐木順三著・昭和三十二年発行
「仏教」（一巻）岩波書店・渡辺照宏著・昭和三十三年発行
「往生要集法話上下」（一巻）顕道書院・勝山善巧著・大正十年発行
「聖書入門」（一巻）岩波書店・小塩力著・昭和三十一年発行
「聖書入門」（一巻）河出書房・北森嘉蔵著・昭和三十一年発行

（広島県立呉三津田高等学校教諭）